

コロンビアの英語教育と赴任校における外国語指導の実際

前在コロンビア日本国大使館附属ボゴタ日本人学校 教諭

福島県教育庁相双教育事務所 指導主事 屋 仲 幸 治

キーワード 在外教育施設、コロンビア、外国語教育、習熟度別、英検

赴任校の概要 (2024年3月31日現在)

学校名: ボゴタ日本人学校 (ASOCIACION CULTURAL JAPONESA)

URL: <https://bogotajapan.com>

児童生徒数: 小学部9名 中学部5名

1 はじめに

私がボゴタ日本人学校に在籍したのは、2022年4月から2024年3月までの2年間である。日本においては、福島県の小学校及び高校（英語）の教員として計14年間勤務した後の赴任となった。中学校での外国語科の指導経験はなかったため、日々試行錯誤を繰り返しながらの実践であった。ここに、赴任校での外国語指導とその実際について紹介したい。

2 赴任校の概要

ボゴタ日本人学校は1977年、南米コロンビアの首都ボゴタに創設され、小学部と中学部が併設されている学校である。また、ここ数年は全校児童生徒が15から20人程度で推移している小規模校でもある。言語的な面について触れると、日本語を母語とする児童生徒が多数を占めるが、海外であることや企業等の保護者の海外赴任に伴うこれまでの生育環境から、バイリンガルまたはトリリンガルである児童生徒も在籍していた。

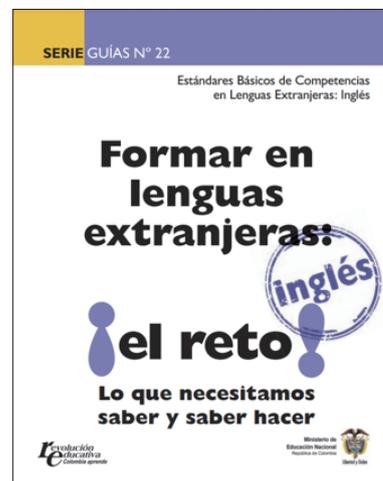
3 コロンビアの英語教育

(1) コロンビアの英語教育の概要

コロンビアは他の南米諸国同様、英語ではなくスペイン語を母国語とする国である。そのため、国内で英語によるコミュニケーションが取れるのは、観光業に従事する人達や、弁護士や医者等のいわゆる高等職に就いている人達が一般的で、おおよそ一般の現地コロンビア人には英語が通じないことが多い。

コロンビア教育省 (Ministerio de Educación Nacional) は2022年に日本の外国語の学習指導要領にあたるガイド「Formar en lenguas extranjeras」を策定しており、バイリンガル教育に力を入れている。

そのガイドの中では、「CFER (外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠)」レベルを基にした学年ごとの到達度目標



や身に付けるべき能力が示されている。

具体的には、コロンビアでは11年生（日本の高校2年生に相当）卒業時まで「CFERレベルB1」（英検2級相当）を習得することと設定されている。日本の場合は、高校卒業時で「B1」が目標となっており、おおよそ同レベルの目標が設定されていることがうかがえる。

(2) 現地校の授業参観より

赴任校に程近い、幼稚園から高校まで併設された私立の一貫校「Colegio Maria Auxiliadora North」で英語の授業を参観する機会を頂いた。該当学年は6年生で、テキストはOxford Universal Press「Shine On 6」を使用し、本時のメインピックは、三人称単数現在形の「S」についてであった。



※ 現地校での授業の様子

導入部分では「You Tube」を使用し聖母マリアを讃える英語の歌を歌った。展開部分では、教科書の項目に沿って一問一答形式でリスニングやライティングの学習が進み、最後に、自分の書いた英作文を基にペアで会話練習をするスピーキングの学習を行った。まとめや振り返りのような終末部分にあたる学習活動はなかった。

この授業は主に一斉授業形式で進み、一部にペア活動が取り入れられた展開だった。生徒の学習意欲は高く、教師の問いかけに対して挙手をしたり、回答したりと反応もよかった。ペアでの活動の際は、教師は机間指導を丁寧に行っていた。授業内容を踏まえると、日本の中学2年生ほどのレベルにあたる感じた。また、日本のカリキュラムと比較して考えれば、2、3学年分学習が進んでいるように感じた。

4 赴任校での外国語指導の実際

(1) 赴任校での外国語指導の特徴

① カリキュラムについて

文部科学省の在外教育施設の今後の在り方に関する検討会が令和2年6月3日に策定した「在外教育施設未来戦略2030～海外の子どもの教育のあるべき姿の実現に向けて～」によると、日本人学校は国・地域ごとの多様な保護者や児童生徒のニーズを踏まえつつ、独自性のあるミッションを打ち出すことが求められており、そのため柔軟な教育課程編成が可能となっている。

赴任校の外国語教育に係る概要は以下の通りである。

(表1)

言語	スペイン語	英語	
授業者	外部講師	外部講師	日本人学校教師
小学部（1～6年）	30	70	なし
中学部（1～3年）			105

※ 数字は年間時数を表す

- スペイン語と英語の2言語による授業を実施
- 小学部1年生より外国語教育を実施

- 外部機関である語学学校講師によるオールイングリッシュまたはオールスパニッシュの授業（会話中心）を実施
- 日本人学校外国語（英語）担当教師の役割は次の2点
 - ・外部講師との連絡調整と管理（外部講師による授業参観を通しての助言等）
 - ・中学部の英語の授業（教科書中心）を担当



※ 外部講師による授業の様子

② 習熟度別指導について

赴任校では、小規模校であること及び児童生徒のスペイン語力や英語力の個人差が大きいことを鑑み、学年を超えた習熟度別クラスを編成し、個に応じた言語環境を設定した。具体的には、小学部1年生から小学部4年生までを3クラス、小学部5年生から中学部3年生までを3クラスの計6クラスに分けて授業を実施した。

③ Zoomの活用について

赴任の1年目は新型コロナウイルスの影響を受け、外部講師が来校することができなかったため、年間を通して外部講師とZoomによるオンライン授業を実施した。2年目は規制緩和により、対面で実施することができた。

(2) 小学部における外国語（英語）指導

学習指導要領において、3・4年生は外国語活動として年間35時間、5・6年生は外国語科として70時間の標準時数が定められている。上述した通り、小学部において実施している各学年の英語の70時間を外国語活動または外国語科としての時数に充てた。また、この時間は全て外部講師が授業者として担当するため、カリキュラムは、小学校外国語活動教材「Let's Try!」と教科書「New Horizon Elementary（東京書籍）」から単語や表現等のエッセンスを抜き出し、それらに沿った指導計画を作成し、外部講師と情報共有した。

(3) 中学部における外国語（英語）指導

学習指導要領において、中学校では外国語科として全学年年間140時間の標準時数が定められている。中学部においては、外部講師による70時間の授業と日本人学校教師による105時間の授業の計175時間を外国語科としての時数に充てた。外部講師による授業のカリキュラムは小学部同様、教科書「New Horizon（東京書籍）」から単語や表現等のエッセンスを抜き出した指導計画を基に会話中心の授業を実施し、日本語学校教師による授業のカリキュラムは教科書に忠実に沿うかたちで実施することで、互いの授業がリンクし、学習内容のスパイラル化が図られるようにした。

(4) 英検指導

英語検定協会の方針で日本人学校も準会場として年3回実施することができる体制が整っており、また、赴任校では、中学校3年生で英検2級の取得を目指すことを重点目標として掲げていたため、目標達成に向け英検指導を行った。少人数であるため、受験希望者の個別のニーズに対応することを原則とし、以下のような取り組みをした。

- 単語帳、問題集等の参考資料の提供
- 1次試験前のライティング特別講座（全4回程度）※昼休みに実施
- 2次試験前の面接特別講座（全3回程度）※昼休みに実施

- 個別相談を実施（自主学習をベースとして家庭の希望に応じ、次の受験までのプランニング設定、質問受付、勉強法のアドバイス等）
- 中学部については日本人学校教師による外国語科の授業内でも英検対策の時間を適宜確保
また、私が在籍した2年間の英検合格者数（延べ人数）は、表2の通りである。

（表2）

学 年	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
取得級	5級①	なし	なし	5級②	3級①	5級①	4級①	3級①	4級①
	4級①			準2級①	準2級①	4級①	3級②	準2級②	2級①
					2級①	準2級①	2級①		

（ボゴタ日本人学校HPより抜粋 ※ ○内の数字は合格者数を表す）

5 おわりに

(1) 「違う」を経験する

海外に出て最も体験的に理解することは日本と「違う」ということではないだろうか。国が違えば、人種が違い、言葉が違い、文化が違い、考え方が違う。当然ではあるが、ありとあらゆるものが違う。このことが、自分にとっては大変有意義で、楽しい経験だった。

(2) 違いのある環境に適応する

在籍している児童生徒の半数程は帰国すると都市部での中学受験や高校受験を控えており、そのため保護者の学習に対する関心や教師への期待値も高く、私が在籍する福島との地域差を痛感した。特に語学については関心が高いと感じ、赴任して間もない頃は結果を残さなければいけないというプレッシャーに苛まれる日々であった。

そのような中でも、冒頭部分で触れたように、試行錯誤を繰り返す中で自分なりに掴めてきたものがあつた。それは、「置かれた環境の特性に応じて柔軟に考えること」である。このことは、日本とは大きく環境が異なる日本人学校に身を置いたからこそ気付いたことであった。

(3) 対話を通して個のニーズを捉え、個に対応する

赴任校の特性とは何か。それは少規模校であること、児童生徒の語学力に大きな個人差があること、限られた日本人コミュニティの中に位置する学校であり、保護者との距離が近いこと、だと考えた。このことを踏まえると、まず大切にすべきことは、児童生徒に限らず保護者も含めて、それぞれのニーズは何かを捉え、その一つひとつに丁寧に対応することであり、それは他者との対話を繰り返すことによってなされるものであることを経験した。

(4) コミュニケーション

対話とはコミュニケーションであり、そのコミュニケーション力の育成が外国語科における最大の目標である。人はそれぞれ違うからこそコミュニケーションを図る必要があり、コミュニケーションを通して人を理解し、ひいては人と人との良好な関係性を育むことができることを、ここで感じた様々な「違う」という経験が教えてくれた。そして、言葉とはそのコミュニケーションの核となるものである。日本人学校で言葉そのものを扱う教科を担当したのものとして、今後もよりよい言葉の使い手を育てる一助を担えればと考える。